

# 軍事郵便のもつ「歴史力」に魅かれて

——その収集・保存・公開・研究について——

新井 勝 紘

## 一 兵士と軍事郵便

ここ数年の動きをみると、戦時中に兵士と銃後の人々の間を唯一つなぐコミュニケーション手段であった軍事郵便についての関心は、高まってきつつあるのではないかと、私は感じている。私自身が軍事郵便に関心をよせるようになったのも、二十数年前になるので、そう古い話ではない。戦争を体験したということは、一人の兵士にとってどういう意味をもつのであろうかという、ごくごく普通の問いをもつて向かい合ったのが軍事郵便である。（口絵1）

ひるがえって日本近代史をふりかえってみれば、我が国はどれだけの対外戦争をくりかえしてきたのだろうか。明治維新以来、昭和二十年（二九四五）までの七八年の間、単純に「戦争」と命名されているものだけでも、五度の戦争をすぐにあげることができるが、事変とか事件、出兵などを含めれば、一回にも及ぶ。ということは七年に一度は対外戦争をしてきたことになる。それも主にアジアをフィールドにして、兵士ばかりではなく、民間人も含めて多くの犠牲者を出し、町や村を破壊し

続けてきた。昭和二十年までの近代史は、まさに「戦争の世紀」だったといえるだろう。

それでは、日本の近代史に刻印されてきたこれらの戦争の歴史で、最前線の最も危険な位置に身を置いて、命をかけて戦ってきたのは、いったい誰だろう。陸軍大臣でもなければ、元帥でもない。圧倒的多数が徴兵で召集された一般の兵士たちである。赤紙一枚で即刻軍隊に入営を命じられ、なおかつ戦争の前線にかり出されて戦ってきた現実においては、そうした彼らの中から最も多くの戦死者を出したのは当然である。召集も一度ならず二度三度と受けた兵士もいる。

そのことを直視すると、戦争体験というのは、まずこれらの兵卒や兵士といわれた多くの一般青年男子の体験にこそ目を向けなければならぬ。彼らがどんな組織の中で、どんな戦場に送り込まれ、そこでどんな戦闘を経験したのか。さらにいえば、戦場といっても、四六時中戦争をしているわけではないので、送り込まれた現場は、彼らにとっては初めての海外体験となり、異国そのものを肉体を通して味わうことになる。そのことから、彼らが見、何を感じ、現地の人々とどう接触し、どんな交流をしてきたか、あるいは軍隊という究極の組織のなかで、どう

いう日常があつたのか、どんな体験をしてきたのかなどを知るために、できるだけ現場に近いところを照射してみなければならぬ。体験者の聞き取りをすると、人前で裸にされて検査された屈辱の徴兵検査と同様に、軍隊生活はあまり思い出したくないという方が多い。

軍隊内で鳴らされる起床ラッパの「起きろよ起きろよ、みな起きろ、起きないと班長さんに叱られる」、消灯ラッパの「新兵さんは可哀想だねー、また寝て泣くのかヨー」の歌詞に象徴的に表出されている現実を、ほとんどの兵士が体験しているのである。

戦後五〇年とか七〇年という区切りの年を経て、年齢を引き下げて無理やり召集した学徒出陣の世代も、すでに九〇歳をこえる年齢に突入している。直接戦地で戦争を体験した人が、いよいよ残り少なくなっている現在のなかで、戦地からの兵士の手紙や戦場でもらった銃後の人々からの通信も、保存や保管という点では、最後のぎりぎりの場面を迎えているのではないかと思われる。軍事郵便は差出人、受取人はもちろん、家族やその関係者、さらにはその人たちの子ども世代までは、戦中戦後の期間、どうしても捨てられない気持ちで優先して、忘れ去られてはいたが、なんとか保存されてきた。しかし、体験者や直接の関係者が高齢化してきた状況のなかで、最後の始末が行われる時が来ていることは確かであろう。孫やひ孫の世代では、薄汚れて色あせた曾祖父の軍隊時代の手紙など、手に取るのも躊躇し、早々に廃棄されるのが落ちだろう。私自身、大学での講義やゼミで、生の軍事郵便を配って各自に読んでもらったことがあるが、それを手にした学生の最初の反応は、汚いものを触るような感覚で手紙に触る姿を見たことがある。平成生まれの学生にとっては、貴重な歴史資料という認識はなかなかもてないのだら

う。

歴史を学ぶ学生ですらそうであるので、こうした状況を黙視し手を拱いていけば、これまであれだけは捨てられないと、秘かに保存し続けてきた軍事郵便も、間もなく消えてしまうだろう。それは戦死した兵士の手紙ばかりではなく、なんとか故国に生還できた兵士の手紙も同様であろう。戦地からの手紙を受け取った肉親や関係者が、大事に保管してきた場合、戦後になつて生還した兵士自身が、自分が出したそれらの手紙を再確認し、再読し、順番などを整理し、なおかつ自分なりに綴り込むなどしてある事例に出くわすことも多い。戦後五〇年とか、六〇年というようにいくつかの節目となる年に、自費出版という形で残そうとしてきた事例もある。戦地で書いた自分の手紙さえ、本人自身の解説が難しい場合もあり、また公開への恥ずかしさも尋常ではないものがある。かつまた、出版となるとそれなりの額がかかってしまうが、最近はそのようにたいくつかの壁を乗り越えて、翻刻に踏み出す人も現れるようになった。軍事郵便の解説に取り組み、印刷まで持ち込んで公開したことによつて、さらに多くの人々がそれを読むことができるようになった事例も増えてきている。それらの多くは自費出版なので非売品が多いが、それでも原物が唯一である場合よりも、より広い読者の目に触れることは、軍事郵便の歴史的価値を認識する機会を増やすことに、一役かうことになる。私は、できるだけそうした情報を得るように努力し、個人での刊行にも注意を払って収集に努めてはいるが、個人での力には限界がある。

日本には軍事郵便に特化した資料館がないのでやむを得ないが、どこかが誰かが担わなければならないのではないかと、日頃思っている。

## 二 私の経験した軍事郵便との出会い

ここでは私が体験した例をいくつか紹介してみたい。

平成二十九年（二〇一七）十月から十一月にかけて、神奈川県横須賀市の横須賀市民大学で、私は週一ではあるが四週連続の講座を担当した。この四回の講座のうち、後半の二回は軍事郵便をテーマにして話す機会があった。講座の内容は「戦場と銃後を結ぶホットライン——軍事郵便に触れる・読む・考える——」と、「命の便り」に込めた兵士の心情に触れる——生きていくことの証明——とした。できるだけ具体的な事例がいいと思い、私の個人的なコレクションの中から、横須賀市に關係する軍事郵便を探し出して、それらを講座で紹介しながら、また各聴講生にも解説に挑戦してもらいながら、軍事郵便を見る、触る、読む、の体験をしてもらった。平日の講座であったので、聴講生の多くは高齢の方だったが、それでも初めて本物に触ったと言って感激しておられた。活字化されたものでは味わえない経験になったはずである。

軍事郵便への関心はいろいろあり、平成二十九年八月にヤフー東京本社イベントスペースで行われた「未来に残す 戦争の記憶」イベントでの私の報告「軍事郵便に見る戦時中のコミュニケーションについて」に対して、戦場での筆記用具は何を使っているのか。鉛筆なのかペンなのか、ペンでも万年筆かガラスペンのようなものかとの質問を受けた。現実には筆の場合もあり、近くにあるものでペンの代用品を作り、それを使ったりしたものもあるが、手紙の内容とは別に、戦場での筆記用具へ注目がそそがれた。葉書に自筆の絵をそえている場合は、色鉛筆や水

彩絵具などは、どこから調達したのかという問題もある。たった一枚の古い軍事郵便でも、奥行きは深いといえよう。

軍事郵便の本物に触れて読んでみるという実体験は、容易にはかないが、軍事郵便そのものを通して、兵士と向き合うことが、兵士の立場に立つて戦争をリアルに体験することにつながる。

専修大学での教員時代、私は何度か軍事郵便そのものを展示する企画展を、ゼミ生といっしょに実施したことがある。小さな葉書や封書を中心にした展示には、会場設営とそれなりの展示の工夫やしかけが必要だったが、反響は大きかった。大学博物館をもたない専大では、まず展示する場所探しに苦労したが、生田校舎のある小田急線向ヶ丘遊園駅前のビル二階に、専修大学のサテライトキャンパスができてからは、その場所を使うことが多かった。駅前というアクセスが良かったこともあって、一般の方の見学者もかなり多かったが、さまざまな反応があった。ここでも軍事郵便の現物を初めて見る方が多かったが、戦争を考える基本資料、あるいは歴史資料や歴史教育資料として、軍事郵便が役に立つのだという印象をおもちになって帰られた方も多かった。そういえば、我が家にもあるはずだと、懐かしさと同時に、もう一度自宅に保存されている軍事郵便に向き合う機会となったことは間違いない。その場では新しい出会いも生まれ、軍事郵便を通しての横のつながりも拡がっていった。

そういう体験者から、実にストレートな反応として、「家に置いておいてもしょうがないので、預けたい」「貰っていただけじゃないか」と、直接私の手元に届けていたたく経験を何回かしたことがある。また、なかには郵送で送られてくる場合もあった。

前述の横須賀市民大学では、四回目の最後の講座の日に、ある受講生が「私の父が持っていた軍事郵便ですが、前回の話を聞いて我が家にも確かあったと、探してみたところ出てきました。このまま家に置いておいてもしょうがないので、先生に提供します」と言つて一五通の軍事郵便を持参してくれた。差出人も受取人もさまざまであるが、中国の北中央、それに満州から、銃後にあてた葉書であった。持参した方の父が、どんな理由で集められたかまでは聞けなかったが、貴重な資料なので有り難ういただくことにした。これもまた講座のおかげといつてもいいだろう。

ここでは、そのうちの一枚を紹介してみよう。満州の牡丹江にいる兵士から、滋賀県犬上郡豊郷村の人に宛てた葉書である。〔図1〕

拝啓 愈々寒さも峠を下り出しました。積雪も日一日と其の丈を縮め、雪の切目より若草は春先に輝き、さも春の喜びを讃へるかの様に、叔父上様、再度の春は巡り巡って兵源台上に出現しました。我々は此の日の来るのを、どれ程か待ちあきた事か。眞君と心は同じ異郷の空で、来る春の長きは二重以上と存じます。(後略)

「此の日の来るのを、どれ程か」待ったことだろうかというくだりは、もう少し深い意味があるのではないか。異郷の空のもとで待ち望む春、それは季節の春でもあるが、筆者の心の中をつかもうとすれば、深読みが求められている。兵士にとって新しい春が来るということへの期待を込めた意味である。

また、私が専修大学の教員であった現職の頃、ゼミ生とともに複数回

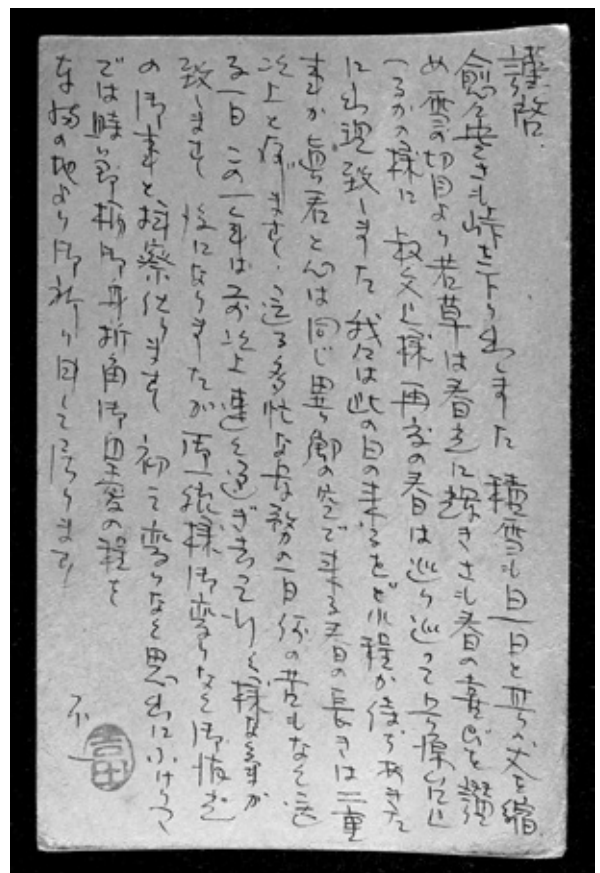


図1 牡丹江にいる兵士からの葉書

実施していた軍事郵便展を御覧になった方が、わざわざこんな手紙をそえて、軍事郵便のコピーを送ってくれたことがある。

「先日そちらにうかがった際に、雑談で、戦争中、祖父が満州の叔父に出した手紙が残っていると、お話したもののコピーです。実物は叔父の奥さんが健在ですので、今はまだ手放したくないが、コピーならよいとの諒解を得ましたので、お送りします。昭和一五年一二月四日から始まっています。渡満が昭和一三年一二月二〇日、約二年分があります。又、叔父からも「昭和一八年六月一八日現在、一九三通もらっている父が、番号を付けて永久保存する」と祖父が文中に記しているのですが、それも十数年前に、蔵をこわし、その後の保存が悪く、日記、商売の記録、その他、みんな二年くらい前に、焼却処分をしてしまい残念です。

内容は主に、手紙を待ちわびる様や、叔父の身を案じる様子、家族親族縁者、近隣の近況報告が主です。(中略) 私達には貴重な内容ですが、資料としてはどうかと思いましたが、一応お送りさせていただきます」とあった。

ここでは、この手紙にある保存されていた軍事郵便の一つを、紹介してみよう。

昭和十八年六月十八日午前九時五分ニ徳治郎君ノ英姿ノ写真到着。早速先ノ写真ト取替ヘテ、床ノ間ニ御安置申シ、徳チャンノ武運長久ヲ朝夕ニ神仏様ニ御祈リ申シ、勿論、朝晩御水ト御飯ヲ一日モ欠カサズ、徳チャンノ前ニ捧呈イタシ居ル。次ニ徳チャンモ、昭和十三年十二月二十日渡満以来、本日迄デノ通信ハ百九十三本目、延吉ヨリ元隊復帰後、第四百四十五本目、一面披ヘ赴任以来三十八本目、一昨年休暇帰隊後第四百四十三本目ノ、何レモ通信デ一通ナリ共、粗末ニセズ、番号附キニテ、父ガ記念品トシテ永久ニ保存シテアル。今日ハ朝カラ雨降りデス(十六日ノ晩カラ蚊ガ出タカラ、蚊ヤヲツリマシタ。余リ当年ハ日中デモ左程暑クアリマセン、未ダ夜具ヲ着テ寝テ居リマス。当方一同達者デスカラ御安心ナサレ。又次便ニ)

出征した息子から「英姿」ともいえる写真が送られてきたので、早速、古い写真と入れ替え、床の間に安置したという。息子の武運長久を神仏にお願ひし、朝晩には水とご飯を欠かさず捧げていると伝えている。大事な息子を思う親ならではの心情があふれている。そして、届いた軍事郵便は、「一通ナリ共、粗末ニセズ」、祖父が番号をつけて、記念品と

して永久保存していることも伝えている。戦地にいる兵士からの手紙は、生存を証明する記念として、「永久保存」の感覚で受け止めていることがわかる。満州国哈爾濱<sup>ハルビン</sup>にいる兵士は、故郷・新潟県直江津の父から、こんな葉書を受け取っていたが、どんな気持ちで読んでいたのだろうか。

逆に兵士から故郷へ出した一九三三通信は、ある時期まで番号を付して永久保存されていたが、十数年前に蔵を壊してからは保存状況が悪く、残念ながら、「二年前くらい前に、焼却処分」されてしまったという。双方が残存していると、戦地と銃後を結ぶ親子のコミュニケーションがどんなものだったかも知ることができたが、あとの祭りであった。軍事郵便の運命の典型的な事例であろう。保存状況が悪ければ、たとえ永久保存でも焼却処分されてしまう。

私が提供を受けた、この兵士が戦地で受け取った軍事郵便(コピー)は、所属する部隊の転戦や激戦などのなかでは、兵士個人が意識的に持ち続けなければ、消失や廃棄されてしまう運命である。除隊や帰還時を経て家まで持ち帰る例は、あまり多くはない。この兵士のように、戦地でそれを持ち続けてきたことは、彼にとつては何ものにもかえがたい手紙だったのでないだろうか。

兵士の受け取った郵便のなかには、英国の捕虜の動静などについての情報もある。昭和十七年十二月十三日の葉書は次のような内容だった。

(前略) 去ル十日午後九時ニ直江津スレン<sup>スレン</sup>レス工場へ英国捕虜ガ三百名、人夫トシテ来マシタ。当地方人ガ珍ラシイノデ、見物人デ山ヲナシテ居ル、併シ敵国人ナレ共、規律ノ良イ事ハ驚ク、捕虜指揮官ハ英国ノ陸軍中佐デス。将校十二名、下士十八名、外兵卒デス。

毎日（リヤカ）ヲヒテ鋳石運搬等ヲシテ居リヤ、日本兵ハ監視トシテ高田ヨリ三四十名来テ居リマス。（後略）

捕虜になった対戦国の英国兵士の強制労働の姿を直視し、その規律の良さに感心しているが、逆に自分たちがこういう立場に立ったときの姿を重ね合わせて見ていたかもしれない。この一枚の葉書からでも、そのとき日本兵がいだいた内心を、読み取ることができているのではないかと私はついつい思ってしまう。軍事郵便は書かれてあることだけが重要なのではなく、書けないことを兵士の立場に立って読み解くことが必要だと思っている。

### 三 「日本一小さな戦争資料館」の英断

兵士が戦場でもらった軍事郵便といえは、最近、山形県米沢市にある公益財団法人 農村文化研究所が刊行した『山形県飯豊町添川村齋藤家軍事郵便資料集』に注目したい。この資料集は、戦地にいる兵士が、妻、娘、母、弟、親族などから受け取った軍事郵便・三三九通（七七七枚）の解説に挑んだもので、貴重な成果となっている。平成二十七年（二〇二五）に開館した戦争資料館の準備過程で、ある古物商から入手したと、解説担当の阿部宇洋研究員が述べている（「解説」）。阿部氏はさらに、地域から出さないで「手紙というきわめて私信的な内容を考慮」してくれた古物商を評価している。とりわけ家族から兵士への手紙の残存が少ないことを考えると、これだけの量の手紙が残っていることの貴重性を認識し、解説に取り組んだともいわれた。「戦中民衆資料が少ない中で、

この資料の持つ意義や期待値は大きく、地方の戦争観、飯豊町添川の戦中史、民俗史などが、この資料集によって新たに判明することもあるだろう」ともいわれている。八畳一間ほどの部屋に、軍事郵便など兵士に関わる戦争関係資料がきちんと展示されている「日本一小さな戦争資料館」（館内に認定証が掲示）が、こうした地味な仕事に取り組まれたことを評価し、他の地域に少しでも広がっていくことを期待したい。

現状でいえば、私が個人的に収集してきた軍事郵便は、一万をこえる数になっていると思われる。正直なところ、自分自身でさえ、その正確な数は把握していない。国や自治体立の博物館、資料館、平和館などの関連機関、さらに大学などの研究機関などに所蔵されている軍事郵便の数も、まだ誰も総計を出したこともないので、数の提示は無理である。それに私のような個人的な収集者が何人いるのかもわからないし、その総計も出ていないわけなので、現時点で、日本全国でどの程度の軍事郵便が、きちんとした形で残されているのかを把握することは、困難である。

現状では、軍事郵便保存会という団体の収集が最も古く、その蓄積は相当なものとなっている。エンタイヤという視点で徹底した収集に取り組んできているので、その数は数十万点をこえるといわれているが、公開には至っていないので、兵士の手紙の残存量とその中身については、まだまだ未知の部分が多いといえるだろう。

ただ、この団体の保存数を入れても、年間四億通という数字が示すように、やりとりされていた軍事郵便の九牛の一毛にさえならないのではないかと私は思っている。

ある意味で戦争体験者が「戦争を突きだしてくれている」軍事郵便の

もつ歴史性に、私たちはもつと注目しなければならないと同時に、忘れ去られたように眠っている軍事郵便の発掘・発見に努め、確認したものだけでも収集、整理、保存、解読し、もつと幅広く利用、公開する道を探っていかなければならないということが、ほぼ日課のように、軍事郵便に接している者の実感である。

だからこそ、全国各地や個々の動きを共有できる、軍事郵便に関心をよせる人々の、ゆるやかな軍事郵便ネットワークができればいいと思っ

#### 四 前田美千雄絵手紙の醒めた眼差し

ところで、軍事郵便のなかでも妻宛ての手紙で最も印象深いのは、なんといつても前田美千雄の絵手紙である。この絵手紙は、すでに高澤絹子編『戦場から妻への絵手紙』——前田美千雄追悼画文集——（一九九八年 講談社）として刊行されている。〔図2〕 同書によって前田の経歴をたどると、東京美術学校（現東京芸術大学）を昭和十二年（一九三七）三月卒業後、三越百貨店美術考案部に就職したが、翌年、二三歳で現役入隊となる。その軍隊での生活は一年で除隊する予定が、なんと五年もの長期となり、同十七年（一九四二）十二月によくやく除隊となる。二八歳にもなっていた。その除隊を待ちこがれるようにして、翌十八年、婚約者で従妹でもあった堀江絹子と結婚する。新婚生活一年を間もなく迎えようとした十九年一月に突然、再び召集令状の赤紙が届けられる。「五年間もお国のために働いたのに、こんなに早く再召集されるなんて、ひどい！、この時ほど戦争を呪ったことはありません」（前掲書）と、

絹子は述懐している。新婚の前田に戦争が牙をむいて迫ってきたといえる。召集前の個々の日常など、まったく考慮することなく、ある日突然襲ってくるようなものであった。

結局、石川県金沢市の栗崎<sup>あわがさき</sup>に設置された部隊に入隊する。同年五月には、フィリピンへ派遣され、野戦自動車廠・機甲整備班として一年あまり従軍。そして終戦を間もなく迎える、その十日ほど前、マニラ東北の山中で戦死したことになる。三二歳であった。遺骨も遺品も何も

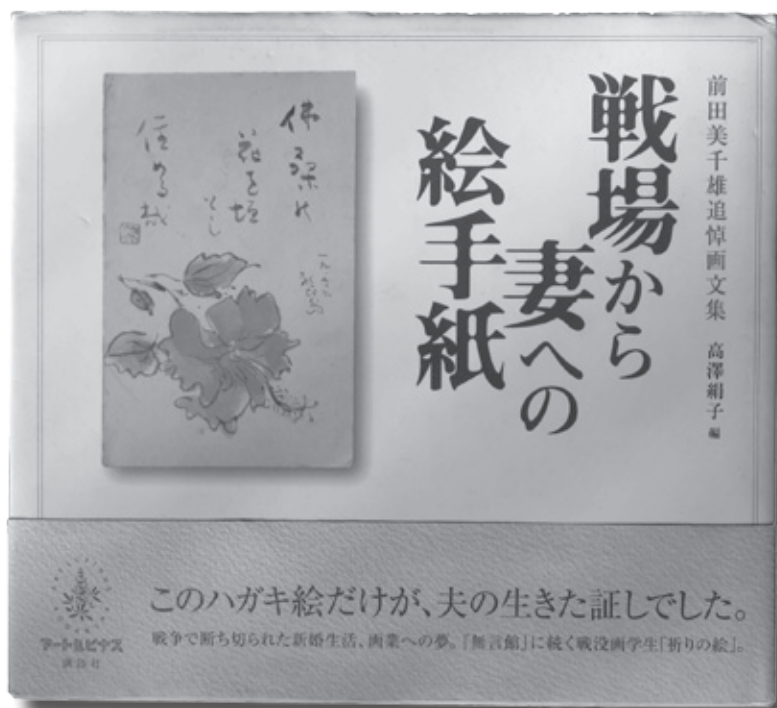


図2 高澤絹子編『戦場から妻へ絵手紙』

戻ってこなかったという。絹子の悲しみは如何ばかりであったろうか。

絹子によれば、美千雄からもらった軍事郵便は、婚約時代であった中国から二五一枚、石川県の粟崎から三四五枚、フィリピンから一三三枚、合計七八枚に及ぶ。ほとんどが絵手紙だったという。また、美術を志したことのある絹子から美千雄に宛てた手紙も、絵手紙だったともいう。

『戦場から妻への絵手紙』に収録されているのは、そのうち五一枚だけである。前田の絵と使りについては、同書に窪島誠一郎(無言館館主)が「前田美千雄さんの絵手紙」という文をよせている。窪島は前田の軍事郵便に、「何ともいえない淡い光を放った色彩と線の躍動感」、「独特のアイロニーと洒脱さのまじった絵の味わい」を感じ取ったといい、さらに絵にせえられた文にも、「理不尽な時局への物言わぬ醒めた眼差し」を感じ得し、前田の屈託のない絵や文に、「その奥にうづく飽くことない「描くこと」への願望、生への飢餓がうかびあがつて」いるとも述べている。「絵を描くこと」をあたえられた画学徒の絵を通して、「無為な死を強いられた数百万兵士たちが語られなかった歴史への遺恨や慙愧」を伝えることができる」と結んでいる。

前田の絵手紙が、私たちに放ってくるものはいったいなんだろうかと考えるときに、窪島の指摘は重く深いものがある。軍事郵便をどう読むかを考えてきた私にとっても、窪島の言葉のもつ意味は大きい。形となって表現された絵と文に寄り添いながら、その絵筆の奥に潜む一兵士の深い心情を読み取ることの大切さを、改めて認識しているところである。数百万人にも及ぶ戦死者たちの、無言の言葉を読み取らなければ、軍事郵便を読んだことにならないのではないかと、自戒を込めて考えている。そのことを念頭に、改めて、五一枚の絵手紙を見てみると、いくつか

私なりに感ずるところがあった。

一つは、フィリピンに派遣される前の石川県金沢の軍隊にいた時に美千雄は、妻絹子からもらった郵便(手紙と葉書)の自分への宛先が記された表面そのものを画材にして描き、それも絵手紙としての軍事郵便として、再び絹子の元に送った、美千雄の切ないまでの妻への想いである。文の出だしは「これはどうだ?、速達の名人!!」とあり、「このスケッチだつて、相当ノシンゾーを要した」と、正直な気持ちを吐露している。さらに、「お前の筆跡を一生ケン命見ながら、お前の字の性格を写すのに苦心したが、こんなことをするのもすべて、すぐ目の前に人が居るところなんだ。にもかかわらず、かくも多数を書くという僕の意志に対しては、お前は心から感心しなければいかん!!」(昭和十九年三月四日)と、続けている。人目もはばからずに、妻からの手紙を前において描写する美千雄の心情を察するに、戦場と銃後の間を往復する絵手紙が、新婚夫婦の心の架橋となり、戦場という場にあつてもというよりも、戦場という異空間の場にあるからこそ、深い絆が両者の間に芽生えたことの証明になる。はたして平時だつたら、ここまでしただろうかと、ついつい思ってしまう。戦争が二人の間を切り裂いてしまった現実はあるが、若い夫婦が交わした七百枚をこえた絵手紙は、決まり文句が並ぶ固いイメージをもたれている軍事郵便の枠を、一歩も二歩もこえているのではないかと思う。前述した窪島はこのことを「ひとえにその画文の底にうめこまれた創造性と真実の勝利だつたらう」とも言っている。まさに言い得て妙である。

また、美千雄は、別の手紙で次のように書いている。「僕のたのしみは改めて言う必要もないが、このエハガキを描くことに先ず第一指を



屈する。(中略)戦地の記録は、たとえそれがどんな片々たるものでも、召された者のみが為し得る尊いものだ。この片々たるエハガキもたまりたまれば、何時かは僕の人生の歴史の何頁かを示すことになるのだと思うと楽しい限りである」(昭和十九年七月二日)。召集されたことを召されたという感覚で受け止め、その中で絵手紙を妻に書いて送る行為を、戦場の兵士のみが為し得る尊いものという自分なりの理解を示している。けして無駄な行為ではなく、自分の人生の軌跡の一つとなることを予想し、自分で自分を納得させている。妻の絹子もまた、それを素直に受け止めているからこそ、絵手紙のやりとりが継続できたのだと思う。

さらに窪島は、この軍事郵便を、一人残された妻絹子が、戦後五十年も守り通してこられたことは、願いもかなわず、ついに戦場に散つてしまった非情な事実に対しての、妻の「堅固な意志」を示しているとみ、だからこそ二人の文通は、いまでも二人の間で「時空をこえて」続けられているのではないかとみている。

私自身幸いに、これらの手紙がまだ彼女の手元にある時、東京都小平市のある施設での展示が実現して、その会場で原資料を拝見する機会を得たことがある。そのとき、偶然にも控室におられた彼女と話をさせていただいた経験がある。長い間、この絵手紙を戦死した夫の形見として大事に保存されてこられた絹子さんと直接対面したあとで、改めて原資料を見ると、この手紙のもつ意味とその限らない重さ、さらには美千雄との二人の間に生じた「生命」のようなものを、それこそ「時空をこえて」感得することができた。

ということは、私たちが今、目にすることができる前田の絵手紙(軍事郵便)は、戦後七〇年を経ても、色あせたり、風化したりせずに、鮮

明な力ある意志を、私たちに伝えてくれるものになっている。その意味で、軍事郵便は即時的な価値だけで終わるものでなく、歲月や時代をこえて、普遍的な歴史力を押し出してくれていると、私はみている。前田の絵手紙は、それを証明するに十分な内容をもっているといえるのではないか。

## 五 「僕とお前」で交わされた軍事郵便

もう一つ、妻に宛てた軍事郵便を紹介してみよう。原資料は私が個人的に収集したコレクションの一部である。「中支派遣軍」のある部隊に所属するIという兵士が、福岡県朝倉郡甘木川原町にいる妻のMに宛てた軍事郵便を見てみよう。Mの手紙には頭に必ず「留守を護る我妻」「愛しき我妻」と付されている。一通一通がかなり長いものとなっているが、時と場所をこえて二人がちゃぶ台でも囲みながら、日常の会話をしているような文体で、素直に表現されている手紙である。読み出すと、お互いの息づかいまで聞こえてきそうな臨場感がある。

まず、書き出しが「お前、……」で始まっている。話し言葉のような書きっぷりである。こんな雰囲気軍事郵便も珍しい。いくつか紹介してみたい。

### Iの手紙 1

お前、今日も無事に作業を終わったよ。

別に変った事無く、元気に過ぎていよ。喜こんでくれ。

家の方も其の後変つた事は無いだろうな。お前も元気に志ている事だろうな。親戚の方々も変つた事は無いか。

僕はお前の送つて呉れた慰問品で、又一増之元気が出たよ。お前の慰問品が着てから、毎日ワカモトを飲んでいるので、体の具合も大変良く、お飯も大変甘味しく戴けるよ。今までは、お飯がまずくて、あまり戴けなかつたのだ。ワカモト大変、体に良く効く様だ。お飯がすんでかならず吞でいるよ。大変腹が空で、次の食事が甘味しいよ。お前有難う。お前、朝はね、味噌汁よ。それにね、田中君から毎朝味の素を戴ているので、味噌汁も大変甘味しく、今迄は半位だったが、今は汁入れに一杯食しているよ。

それでね、僕も我儘言てすまぬが、次に送れる時に、味の素を入れて送つてくれないか。南京にも有るよ、でもお前が送つて呉れたのが僕は良いのだ。でも内地は大変物価が高く成つていたので、僕が種々な物を言てやればお前、大変ね。僕はそれを心配していたのだ。

お前、味の素ね、高さが一寸五分位のが一円以上するそうだ。お前、内地は何位ぐらいいしているかね。高い様だったら送らなくても良い。

毎月の慰問品も、お前大変ね。でもお前が送つて呉れるので、僕は嬉しかったよ。

お前、又明日検便よ。腸チブスのウタガイの患者が出ている様だ。又、大便を取つて医務室に出さねばならないよ。でも前から何回と無く取つて出したので、もう平気で取つて出せる様に成つたよ。初め取る時は、一寸面くらつたよ。翌日に成つても便の出らぬのに、

閉口したよ。もう成れて大丈夫よ。

お前、明日外出日に成つたよ。丁度前の外出日から十日目よ。月に三回だから、十日位置て外出が出来るのよ。前の外出の時に、僕、印を造りに行く様にしていたが、時間の都合で帰つて来たので、明日は活動を見て印屋に寄て歩て帰つてくれれば、帰隊時間前に帰隊が出来るので、明日にはそんな行動を取りたいと思つている。でも友達から買物の依頼を受ければ、又時間一杯に成る様に成るよ。十二時半から準備して隊を出て、二時間ばかり時間が有る。六時に帰隊なので、五時半までには内務班に帰りたいと思つているのだ。

お前、今はね、僕らの工場も仕事が減っているのよ、大変楽よ。昨日まではな、三人も四人も掛つて作業仕ていたよ。今日僕、中食後は本部の車に掛つている。一寸した作業なので明日の午前中には仕上るよ。又、仕事の多い時は、夜間作業でも何日も続けて作業をする事もあるからな。作業に就ている其時は、寂しさも一寸まぎれているが、作業が終り、夕食を済して内務班の床の上に長く成つて、日が西に入りウス暗く成ると、何となく寂しく成つてくるよ。お前の事や家の事と、次々に思い出されて寂しい。今も何だか寂しい日である。

お前の便りも四五日着ぬ。其の上に慰問品も着ぬ。九月七日の慰問品は受け取つているけれど、七月の分や八月の分が着かぬ。お前も便りに書く様に寂しい。こんな日にお前の便りが着いたら嬉しいね。又、一緒に留ている事だろう。一度に来る事だろうな。一通ずつ来て呉れ、ば良いが、戦地の事だから野戦局も大変な事と思えば、僕の事、我事に思つてはならない気持ちも浮て来るよ。

第一戦線に居る兵士と思えば、僕等よりまだまだ内地の懐しい便りも十分に行っていない事と思うよ。僕等は外出も出来るしな。お前、今日ね、冬服を上下貰ったよ。僕は新品じゃないよ。中古よ。でも結構だ。今度貰う冬服はほとんどラシャじゃ無いのよ。陸軍色の綿に裏にコウテン<sup>マツ</sup>の裏が着てあるのよ。でも僕のは一度良いラシャの服の寸法の合のがあつたので、貰ったよ。中古でも結構よ。次から次からと二人りの名前<sup>マツ</sup>が書いてあるよ。僕で丁度三人目に成っているよ。腕の内ガワが破れてアテ、あるので、僕が又後で、手を入れてキレイに仕たいと思っているよ。

お前、前の外出の行動、とうとう知らせずに、又明日外出に成った。今度はお前に知らせるよ。それからね、お前、ラッキパズル大分仕上げたよ。でも出来ないやつがタアタア（支那語よ）あるよ。内務班の友達も面白がつて並べているよ。ムツカシイやつがあつて、僕困っているのだ。でも一度は全部造り上げたいと思つて、力を入れているよ。寂しい時など、一寸気をまぎらす事も出来るが、やはり心から寂しい時は駄目だ。お前、今日は取り止めの付かぬ事ばかり書いていた。これでペンを止めよう。お前元気だね。

留守を護る我妻 Mへ

十月十二日 主

僕とお前というやりとりで面食らうが、彼にとっては当たり前の呼称だったのでないか。お前からの慰問品について感謝しつつ、無理しなくていいと付記している。妻への思いやりであろう。長文の手紙である

が、一人の兵士の抑えようのないつぶやきの箇所がある。一日の作業が終つたあと、「夕食を済して内務班の床の上に長く成つて、日が西に入りウス暗く成ると、何となく寂しく成ってくるよ。お前の事や家の事と、次々に思い出されて寂しい。今も何だか寂しい日である」。

私が想像すると、辺りは夕日が沈み夕闇が迫っている、そんなとき、一人床の上で体を横にしていると、故郷の妻や兄弟のことがふと眼に浮かび、言い知れない寂寥感が込み上げてきている。軍務に精励している兵士であればあるほど、こうした感情に包まれるのではないだろうか。自分の気持を何の銜いも無く、正直に記すとこんな文になるであろう。こういう状況になるのは、何も彼だけではない。戦場にある多くの兵士の偽らざる心情ではある。お前からの手紙についても、四、五日何も届かないと「寂しい」と訴えている。寂しさに耐えかねているような「こんな日にお前の便りが着いたら嬉しいね」とも。一度にまとまつてこないで、「一通ずつ来て呉れ、ば」なおいいのだがと、希望的観測をのべつつ、手紙の最後には、いろいろと気を紛らわすこともしているが、「やはり心から寂しい時は駄目だ」と弱音を吐いている。それが僕の心の内だろう。戦地にある兵士の共通な思いが、この軍事郵便からは読み取れる。

もう一通紹介しておこう。

#### 1の手紙 2

便り、有難う。懐しいお前の便り受け取つたよ。

お前他に、福島叔母様から新聞二ツ、何時も送って戴いているよ。お前、暇が出来たら、一寸御礼を出してくれないか。

お前、病気は治つて、今は毎日毎日元気で居るよ。

三通も一緒に着いたね。それは良かったね。別々に着いたら、お前も大変。心配した事だろうな。僕は真面目な事を知らせたのよ。僕もお前が心配するだろうと思つていたので、心配していたよ。でも三通一緒に着いたので、結果が次々に判つて良かったね。お前等が御先祖様や神様に願っているので、病気しても急ぐ治して戴いているよ。お前、有難う。

お前が心配しているけれど、お前が送つた慰問品で悪く成つたのではないのよ。氣候の変わり目で丁度腹当りに成つたのと思うよ。

お前、兵子やシャツ類、まだ沢山持っているのよ。まだ送る事は居らないよ。入る時には知らせるから送つてくれ。

お前、僕は今大変な衣持ちよ。冬物も沢山持っている。夏物もまだ持っているよ。無地に凱旋したら、余り捨てないので、お前も驚く事と思うよ。兵子も捨てずに洗濯しているよ。

そうだ、僕等の凱旋だめになつたよ。前に書た様に、航空廠に行く様に成つている様子だよ。で南京にまだ残て居る事になるよ。

お前の言う通りに、お互に。僕の最愛の妻であるからな。

お前、今丁度、工員の友達が十三日に安慶に交代に行くので、別に一杯食<sup>マ</sup>んでいる処よ。僕も一杯食<sup>マ</sup>んで、又お前、便りを書き續けているよ。今前進していた工員二名の内、一名が變つて来たよ。話に依ると、安慶は大変に悪く、敵襲も一日に三四位来ているそうだ。宿舎も悪く、蚊や南京虫に襲撃されるそうで、とても不潔で腹痛や下痢が多いそうです。今、帰隊した工員が上野君と交代を願っているそうで、今でも腹痛で困っているそうで、前進してすぐ起したそ

うです。交代に来て貰らわねば、病気に成つて帰つて来ると言っているそうよ。大変困て居る様子の話しよ。今の話しでは前進せない方が良いと言てあるよ。僕等は航空廠に行けば前進はないと思うよ。先々は判らないけれど、半年内には異動に成る事も有ると思うよ。もうその時は大丈夫よ。やはり外出は引車外出よ。敗残兵は居ないけれど、第一線に立っている戦友の事を思つてよ。今は会いたい友にも会えませんが、でも仕方がないよ。皆そうだからな。

お前、前にも書た通り、七信だけ着いたが、お前等の写真入つていなかったよ。

お前、草城君からの写真、着た様ね。僕も送っているが、着ているだろうな。他には凱旋されている様ね。僕も早く凱旋したいが、今の處、判らぬよ。前に書た通りに成る事と思うよ。田中さんの娘さん、亡なられたか。御仏前<sup>マ</sup>仕<sup>マ</sup>てくれたのね。有難う。良く氣を付けてくれて有難う。

お前、無儘や講の掛金の事、良く書てあつたので、僕にも良く判つたよ。有難う。あゝ、そうか。飛行隊の事も噂話で良く知りはいなかつたが、お前の知らせて良く判つたよ。それで友達も早く帰つて支廠に入りたと言つて居るけれど、皆同じで、凱旋で来ず、皆力を落しているよ。

お前、今日も不寝番よ。十二時半から一時半までよ。お前に便りを書く時は、不寝番に成るね。前も不寝番に当っていた事が多いよ。

お前、武田隊の西川大尉殿、今度病気に掛つてあつたが、昨日病死されたよ。今晚通夜の話が出て居たが、明日に成つたよ。おしい、大尉であつたが、病名はセキリであつたのよ。

支那は不潔な地なので、一寸した病気で由断はならぬ様、あまり見ていると、一名に掛る事が多いのよ。全部手遅れが危険が元の様と思うよ。僕は十分気を付けているので、安心して居てくれ。今日はこれで失礼するよ。

体を暮々も大切にね。家中の者、頼むよ。

七月十一日 南京 主

愛しい我妻 Mへ 読み返さぬよ

「凱旋がだめになったよ」と、さりげなく伝えてながら、「お前の言う通りに、お互に。僕の最愛の妻であるからな」と、意味深長な文が続く。二人の間には、これでしつかり意志疎通が出来ていたのかもしれない。凱旋については後半にもでてくる。「僕も早く凱旋したいが、今の處、判らぬよ。前に書いた通りに成ると思うよ」と、帰還がなかなか見通せない状況への不安が、垣間見える。

## 六 「征チャンシンブン」と「北上平和記念展示館の軍事郵便」

軍事郵便そのものの歴史力という点では、山口県下関出身の小林喜三が戦地から、まだ幼い一人息子の征之祐に宛てた絵入りの手紙は落とせないだろう。幼子を残して戦場に向かった若い父親が、我が子への限らない愛情を込めて送り続けた絵入りの手紙は、見る者の心を揺さぶる。「征チャン新聞」と自ら名付けて、子どもに少しでもわからせようと、

戦地で見た、興味をもちそうな題材を、それも色をつけて描いている。一目見て、その絵心の高さを知ることができると手紙である。受け取った征之祐は、まだ幼く、父の絵を理解できたかどうかの年齢であったが、父としては書かずにはいられない思いが噴き出たのだろう。父親としての抑えようもない愛息への思いが、一枚一枚の葉書にあふれんばかりに表出されている。

私は下関で、征チャンこと征之祐氏のご好意で、昭和十七年（一九四二）から十八年にかけて、ニューギニア島の東にあるニューブリテン島のツルブという地から出された一四三通の原典を見る機会があったが、即座にその絵の魅力に引き込まれてしまった経験がある。画面から訴える力に、圧倒されてしまった。内容については、『ツルブからの手紙』（小林

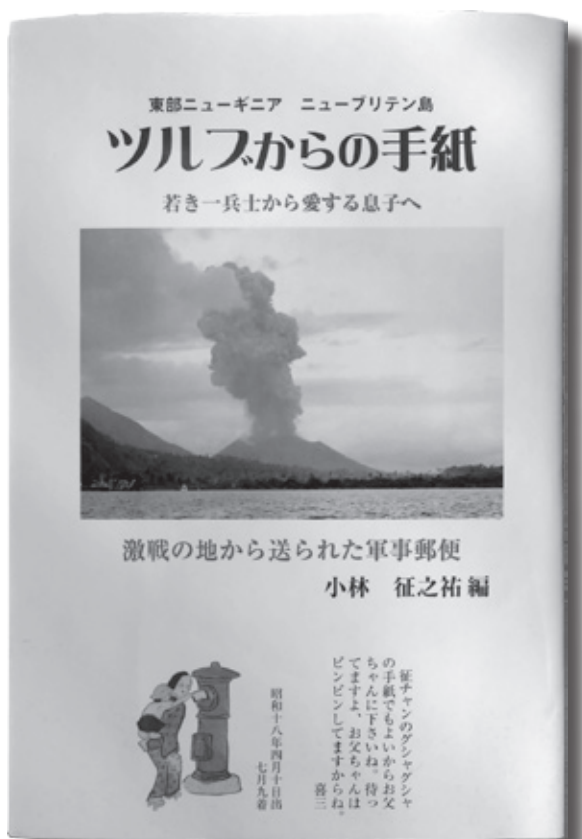


図3 小林征之祐編『ツルブからの手紙』

征之祐編、新日本教育図書、二〇〇七年刊行)〔図3〕を見ていただきたいが、戦後、父からのこの手紙を大事に保存されてこられ、多くの人々に見てもらおうと勇気を出して公刊に踏み切った征之祐氏の意志に感謝し、敬服しているところである。征之祐氏は残念ながら、本年(平成二十九年(二〇一七))亡くなられてしまったが、改めて評価したいと思っている。

今年、二八一頁にも及ぶ分厚い軍事郵便復刻版が、刊行された機関のご好意によって私の手元にも届けられた。『北上平和記念展示館の軍事郵便』(北上平和記念展示館編著、二〇一七年、非売品)である。編集者は高橋源英氏、高橋洋明氏、川島茂裕氏の三名。北上市のこの展示館に所蔵されている軍事郵便は、地元教員だった高橋峯次郎のところに届いた、主に地元出身の兵士が、高橋から送ってもらった郷土便り『眞友』に対しての御礼の意味も込めて、それぞれの任務地から差し出した軍事郵便であり、「七千通の軍事郵便」として知られているものである。長く高橋家に所蔵されていたものを、地域の人が平成十四年(二〇〇二)に藤根農村生活改善センターだった場所を借用して開設した北上平和記念展示館〔図4〕に、保管し、展示することにしたものである。この軍事郵便については、私にとつては思い入れが強い。というのは、平成七年(一九九五)から国立歴史民俗博物館(千葉県佐倉市)の基幹研究として取り組んだ「近現代史における兵士の実像」という共同研究で、最初に調査させていただいたのが高橋家の軍事郵便だったからである。軍事郵便調査に快諾していただいたので、担当者一人として私は何べんも高橋家に通い、庭にあった蔵や家所蔵の文書などの悉皆調査に取り組んだ経験がある。七千通をこえる軍事郵便を蔵から取り出したときの、強烈な印象が思い出される。すでに七千通の軍事郵便として、地元の方々の

研究成果が複数あり、NHKの番組などにも紹介された軍事郵便であったが、その保存状況はけして好ましいものではなかった。大量の軍事郵便を前にした時以来、日本における軍事郵便の保存や保管の問題点を強く意識するようになった。その保管と展示する場所としての北上平和記念展示館が実現されたとのニュースは、私の私的な心配を吹き飛ばしてくれるものだった。この施設の開館が刺激となって、全国各地にこういう施設ができればと、期待も大きく膨らんだ。開館後も何度か訪問したことがあるが、今度の『北上平和記念展示館の軍事郵便』の刊行は、館の活動の充実ぶりを証明するもので、着々と成果を出されていることをともに喜びたい。

今回の出版は、七千通のなかの、一八一通の解説に取り組み、原文を誰でもが読めるようにした意味とその功績は大きいものがある。そして、解説文には、詳細な注書きが付されており、戦争を知らない世代にとつても貴重な情報を丹念に付記してある。この仕事だけでも、かなりの時間と労力がかかっていることは容易に理解できる。今後の軍事郵便の翻刻の一つの実例となることは確かであろう。さらに編者三名による解説も軍事郵便研究に一矢を放つほどの充実した内容となっている。たとえば、ドイツの野戦郵便との比較論に挑戦しようとしている川島氏の解説(『ドイツの野戦郵便と『北上平和記念展示館の軍事郵便』』)にある、「検閲をすり抜け、遺された軍事郵便から、何を引き出すか、という力量が試されている」と、軍事郵便を読む側の力量が問題だという指摘に共鳴する所が多い。つまり軍事郵便と対峙する時には、読む側の問題意識が問われるということだろう。私自身も何度も経験したことである。軍事郵便を取り巻くさまざまな問題を考える時に、こうした動きと視点が出て



図4 北上平和記念展示館

来たことの意味は大きいと私は考えている。

## 七 おわりに

最後に軍事郵便研究の私の課題について若干触れておきたい。

すでに「軍事郵便文化」の形成とその歴史力」（『郵政資料館 研究紀要』第二号 郵政資料館 二〇一一年三月）などで触れたことがあるが、いくつかその後、考えていることがあるので、プラスしておきたい。

### 1 軍事郵便をめぐるゆるやかなネットワークの形成

本文中に触れたが、軍事郵便をめぐる情報を、もつと共有するために、ネットワークの立ち上げができればいいと考えている。それがひいては、軍事郵便研究のすそ野を拡げ、軍事郵便保存と公開への道を開くことにつながる。

### 2 軍事郵便体験と戦後地域文化運動

当時の二十、三十代の青年たちが、年間億をこえる軍事郵便を書いた時代は、史上初めてであろう。自分の経験や自分の感情を曲がりなりに一つの文として表現した経験、それも単数ではなく、数十通あるいは数百通という数の手紙をモノにしたという事実は、なんらかの形で蓄積されたのではないか。その表現力、文章力などは、戦後を生きるうえで影響を与えないはずがないと考えている。そのことは、戦後すぐに勃興する地域文化運動の原動力になっていないかという仮説を立てている。

3 親、子、兄弟姉妹、妻への手紙と家族観

2 のことと関係するが、軍事郵便の宛先と差出人との関係から、家族観へ影響を与えていないかというのが、もう一つの仮説である。

4 戦時期に刊行されて、同時代の人々が読むことができた軍事郵便の研究を進める。冊子等になっているものの内、主なものは以下の通り。

①『郷土の便り、勇士の多与利』(内田弥助・一九三七年 一九七九年に『皇軍将兵慰問状綴』(一)～(五)として刊行)

②『聖戦書簡集』(一九三八年)

③『戦歿将士陣中だより』(一九三九年)

④『日本出征学生の手紙』(一九四〇年)

⑤『絵と文の現地だより』(三上卯之介・一九四〇年)

⑥『青年教師の戦線通信』(中村外喜雄・一九四二年)

⑦『聖戦書簡集』(秦賢助編・一九四二年)

さらに、当時の新聞や雑誌等にも、戦地からの便りというような形で、掲載されているものもある。

5 絵手紙の形の軍事郵便の基礎的研究。

兵士自らが筆をとって描いた絵画から、何をどのように表現して、誰に向かって伝えようとしていたのかについての考察。

#### 著者プロフィール

新井勝紘(あらい・かつひろ) 昭和十九年(一九四四)東京都生まれ。

東京経済大学経済学部卒業後、町田市史編纂室・町田市立自由民権資料館主査を経て、国立歴史民俗博物館助教授へ転職、平成十三～二十七年(二〇〇一～二〇一五)まで専修大学文学部教授を務める。

主要著作・論文…『戦いと民衆』(編著 東洋書林、二〇〇〇)、『近世から近代へ 近代移行期の民衆像』(編著 青木書店、二〇〇〇)、『多摩と甲州道中』(共著 吉川弘文館、二〇〇三)、『自由民権と近代社会』(編著 吉川弘文館、二〇〇四)。

「軍事郵便の基礎的研究(序)」『国立歴史民俗博物館研究報告』(二二六号、二〇〇六)。「パーソナルメディアとしての軍事郵便——兵士と銃後の戦争体験共有化」(『歴史評論』六八二号、二〇〇七)。